

笠原清志 教授のご退職に寄せて

中村 陽一

NAKAMURA Yoichi



本年3月末日をもって、笠原清志教授が立教大学を退職される。笠原教授は、2002年の研究科設立以来（正確には準備段階から）、北山晴一名誉教授などとともに中心的役割を果たしてこられた。いわば、本研究科の屋台骨を支えてこられた重鎮であり、研究科にとっては非常に残念なご退職である。私情をはさむようで恐縮だが、私自身、笠原教授とは、創設準備段階からの苦楽を共にしてきただけに、同じく創設以来のメンバーである川村仁弘教授の定年退職も重なって、喪失感と寂寥

感は深い。これで、設立時からの専任教員は、私だけになってしまうことになる。とはいえ、寂しがってばかりもいられない。今日、「社会（ソーシャル）デザイン」「コミュニティデザイン」ということばに接する機会は急速に拡大しており、プロジェクト名、組織名、書名はもとより、活動や事業のキーワードとしてその名を冠するものも数多くある。「コミュニティデザイナー」をもって任ずる人たちも次々現れている。

そんななか、2013年度、研究科は創設12年目を迎え、これまで着実に進めてきた社会デザイン研究の深化と、その社会への実践的なフィードバックをさらに充実したものにすると同時に、時代と社会の変化に深いレベルで「応答」し続けていけるような次なるステップをもめざしていかなければならなくなっている。

そうした転換点にあって、これまで研究科における教育・研究を、組織（論）研究をはじめとした理論的な側面から支えてこられた笠原教授のご退職は、私たち残る者が知力・気力・体力をフルに発揮して、研究科の理念を内外で実現していく気構えを新たに作る機会ととらえたい。

笠原教授の長年にわたる膨大な業績について、この短いスペースで何かを語ることは到底私の手に余ることであるため、それは教授のご経歴や著作リストを参照していただくこととして、ここでは、研究科でのエピソードを簡単に振り返ることで、ご退職に寄せての言葉とさせていただきます。

笠原教授との出会いは、研究科創設への準備過程において、やはり深く関わっておられた栗原彬教授（当時、現・名誉教授）のご紹介だった。栗原先生にうかがった研究科のビジョンはたいへん魅力的なもので、いまもよく覚えている。そして準備段階のミーティングで笠原教授にもお目にかかってお話をうかがい、直感的に私は、確かに

この研究科はすごい、と強く興味を引かれるとともに、その中心の一人でもある笠原先生という人はいったいどんな人なのだろうと、関心を抱いたこともよく覚えている。

こうして私もまた、「21世紀ワールド」に魅せられ、運良く創設から研究科コミュニティの一員となったわけだが、準備期間も含め12、3年ご一緒してきて思うのは、笠原教授がお持ちになっている（のではないかと私が思う）「知」や「理念」や「理論」というものにたいする畏敬の念、そしてそこから導き出される学問へのアプローチの仕方が、実践的研究領域を対象とする本研究科にとっては大きな財産であったということである。

ただ、少し踏み込んだ推測をお許しいただくなら、お付き合いが長くなるうち、そうしたお考えと方法論の深いところに、アンヴィヴァレントなものも感じられるところにこそ、笠原教授の大なる魅力があると私は考えるようになった。生煮えの表現で恐縮だが、だからこそ、教授のようなご経歴の研究者が、（いかに、もろもろのしがらみがあったとはいえ）「社会デザイン」という、研究科創設当時には茫洋としてつかみどころがないように見えたであろう分野に乗り出されたのではないかという気がしてならない。

そんなことを考える決定打となったのは、ご著書である『社会主義と個人—ユーゴとポーランドから』（集英社新書、2009年）を読ませていただいたことである。それまでも度々、旧ユーゴ留学時代のお話うかがっていたものの、本書によって、断片はつながり、笠原先生の学問研究にたいする姿勢と本研究科における先生の立ち位置の示すものが私のなかで少し像を結んだように思えたのである。

些細な例を挙げるなら、研究科の教員・学生が何度も耳にしている通り、笠原教授は自らをシェルターになぞらえ、万一、指導の先生と相性が悪いときには私のところに来てください、とおっしゃる柔和な顔を持つ。しかし、その指導は、知というものにきわめて厳格であり、時に厳しい。私などはよく、「先生、顔は笑っていますけど、目が笑っていませんよ」と失礼な冗談を言ったものである。実際、私が少しいい加減なことをいおうものなら、すぐに「中村さん、それどういうこと？」と質問され、冷汗をかくこと度々であった。

だが同時に、その人の立場とか役割を理解されると、非常に行き届いた慮りをなさるのも特徴で、時折、そのためにとぼけてさえおられるのを何度も目にしたのも事実である。

こうして、教授の「知」「理念」「理論」にたいする厳格さと「組織や体制における個人」へのまなざしの深さが、本研究科の社会デザイン研究に与えた影響はきわめて大きいと私は考えている。生意気を承知で言わせていただければ、おそらく笠原教授の研究者人生にとっても、本研究科での11年間は刺激のある年月であったのではないかと信じたい。そうであるからこそ、私のような「野生雑種の研究者」も笠原教授とのやり取りから本当に多くのものを学ぶことができたことあらためて感謝申し上げたい。

もちろん、これで笠原教授と本研究科との御縁が切れるわけではない。4月から（幸い池袋にもほど近い）跡見学園女子大学大学院で研究指導をなさるとうかがっており、また本研究科の院生にたいしても、折にふれ、さまざまなアドバイスをしていただけたと思う。ぜひ今後も研究科の行末を見守っていただくと同時に、今度は外部の視点からご助言いただくことをお願いしつつ、これからのさらなるご活躍とご健康をお祈りして、ご退職に寄せてのささやかなご挨拶とさせていただきますと思う。